

ちよつとしの話

第一四三号

光

日本の何處かで素晴らしい御来光を拝みながら新年を迎えた方も沢山お見えになつた事とお慶び申し上げます。昨年は日本を含め多くの地で災害がありました。暗い世相に灯る一筋の光明は御来光の如く深い感銘を我々にもたらす事でしよう。その光明とは被災者にとつて物心両面の援助は勿論の事、近い将来に於ける生活の安定と一日も早い安心安全の復興であろうと思われます。我々は光から暖かさ、明るさ、光明や人間から出るオーラなどを想像します。光は人間にとつて欠かす事の出来ないプラスの心的要素を持つっています。三島由紀夫は中期の作『笠閣寺』の中で「もし人間がその精神の内側と肉体の内側を、薔薇の化弁のように、しなやかに翻へし、巻き返して、日光や五月の微風にさらすことができたら云々」との人間としての願望をしたが、成就すること無く最後に主人公は金閣寺に火を放ってしまうのであります。仏教では火をもつて浄化する作法があり、三島由紀夫氏も仏教に傾倒されたのではないでしようか。私は護摩もその一種と考えています。光は明るさと同時に速さにおいても特別な存在でした。例えば新幹線が出来、速さの象徴として「号」が走り、現在は「のぞみ号」にその存在を譲りました。最近では「光」より早いといわれる「ユートリノ」が発見されたのも時代の流れでしようか。

さて仏教に於ける光ですが、光明は呪文のようく称える事でその力が發揮される様です。悩み多き我々を救済する為に「一般的に良く知られている攝益文」（天台宗では觀經文）の光明遍照、十方世界、念佛衆生、摄取不捨では念佛を申す者は阿弥陀如來の光明で救われる事がありますし、密教で称える真言には大日普門の満徳を二十三字に撮た光明真言 オンアボキヤベイロシャナウムンがあります。この真言を称える事により佛の光明に照らされて如意円満に成れるとの事です。このように仏教では、仏身より出る光、光明によつて我々が救われる事に成つております。ほかにも般若心經秘鍵には蘇生（そせい）の族ら途にたたずむ、夜変じて日光赫々たり」とあります。蘇生とは生き返ることであり、日光赫々たりとは太陽が赤く輝いている様子です。最勝根本大陀羅尼の説明でも真言を称える者は「身より光明を放つて、諸々の魔王を降伏し、所求の一切の事、持に随つて成就することを得べし」と要するに身を護り、恐怖を味わう事無く、常に安穩を得る事ができると言われています。檀信徒の皆様がこの一年を燐々と輝く光を浴び心身快楽に過ぎざれん事を祈念す。